

五月心光寺定例聞法会のご案内

- ＊期 日 平成十四年五月十六日(木曜日)
- ＊時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より
- ＊会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏
- ＊講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

心光寺からの便り



雨上りの戸外に
立つと、風が若葉を
揺らせて吹き抜け、
新緑の香りがさつ
と一面に漂います。
緑に染まった透明
な風に全身をさら
す心地よさ。遠くに
水田を耕す耕運機
の音がかすかに聞
こえ、みずみずしい
季節の中で、生きて
あることの喜びを
静かに感じます。

さて『歎異抄』と
いう書物の名前に
ついては、既にお聞

きになっておられる方が多いかと思えます。親鸞しんらん聖人のお弟子の唯円房が同心
行者の不審を散ぜんがために、耳の底に残る聖人の折々の言葉をまとめた貴重

な書物です。この『歎異抄』の中に、「如来よりたまわりたる信心」という言葉が出てきます。信心というと、鰯いわしの頭も信心からとか、あの人の信心は深いとか、要するに私たちが何かを信仰する心の状態を指す場合が一般的です。だから人によつて、深い信心もあれば浅い信心もあると当然の如く考えられています。

ところが『歎異抄』では、親鸞聖人が法然上人から教えていただいた信心は自分が起こす信心ではなく如来からたまわつた信心であるから、人によつて浅いとか深いとかの違いはなく、ただ一つである。法然上人のように智慧才覚の優れた方の信心も、入信歴が浅く智慧才覚の劣つた弟子の信心も、往生の信心においては全く異なることはない。ただ一つである。もし師匠の法然上人の信心と弟子たちの信心に差異があると考える人がいるとしたら、そう考える人は法然上人が生まれる浄土へは生まれまいであろう。こういうことが法然上人の言葉としてはつきりと述べられています。

ところが私はこの「如来よりたまわりたる信心」ということが長い間わからずにきました。論理では頷うなずけても、実際問題としては、やはり人によつて信心に差異はあるだろうという思いがどうしてもぬぐえませんでした。

或いは『御文』おふみ（浄土真宗の中興の祖蓮如上人が遠方の門徒に書き送つた手紙を、真宗門徒の拝読文として編纂したもの）には、

信心といえる二字をばまことのころとよめるなり。まことのころといふは、行者のわるき自力のころにてはたすからず、如来の他力のよきころにてたすかるがゆえに、まことのころとはもうすなり。

（第一帖目第十五通）

ということが書かれています。すなわち親鸞聖人の教えて下さる信心は凡夫の起こす悪い自力の心ではなく如来のまことの心であり、だからこそ私どもが助かるということもあるのだと教えて下さっています。しかし悪い自力の心しか持ち合わせていない私に、たとえ賜つたものであるにしても、果して如来のまことの心が起こることがあり得るのだろうか。言い換えれば、有限の心しかな

いに無限の心が起こることがあり得るのだろうか。それは不可能なことではなからうか。一体如来のまことの信心を賜るとはどういうことだろうか。いかにしたらまことの信心を獲ることができののだろうか。

長い間そういう所をうろろしてきたのが私です。ああ、本当のご信心を獲たいものだ。教学とか、仏教の言葉をあれこれ知るとか、そんなことはどうでもよい。そんなことでどうにもならぬことは、人に言われるまでもなく私自身が一番痛感している。ああ、本当のご信心に生きておられる師に出会いたいのだ。もしそういう方がおられるなら、私は何を置いてもその方の所に出かけていって、信心の要について教えを請うだろう。そういうことを長い間思い続けてきました。そうして幸いにもお会いすることができたのが大石先生でした。

その大石先生が座談会の席で、次のようなお話をされたことがあります。それは『御文』の中の「末代無智の、在家止住の男女たらんともがらは、こころをひとつにして…」という言葉が始まる一段(第五帖目第一通)についてのお話でした。

ご師匠の藤解先生のある時のお話です。「今日はあんた方に信をあげますよ。阿弥陀様は我々を『十方衆生』と呼んで下さるけれども、みんなそれは自分のことではないと思って返事せんじやろう。でも『大石よ』と呼ばれたら変事をするじやろう。如来様は我々に向かつて、一人一人の名前を呼ぶように、『末代無智の凡夫よ』とおっしゃるのですよ。私に対しての呼びかけなら、ハイッと返事が出るはずじゃ。返事ができないのは自分が悪人、無智の凡夫とわかっていないのじゃ。私が今から一行ずつ読むからハイッと言うて返事をしなさい。『末代無智のー』『…』『返事せんにやあ』『ハイッ』『在家止住のー』『…』『返事せんかい』『ハイッ』『男女たらんともがらは』『ハイッ』『こころをひとつにして』『ハイッ』…こうして最後まで行って、「さあ、ご信心いただけたでしょう。もう完全に。よかったのう。」

教える人はこうやって、何とかして私たちにご信心を獲させようと思って、

噛んで含めるようにして導いて下さるのですよ。

(平成十三年十二月十六日、心光寺定例聞法会、夜の座談会より)

大石先生は生前のご師匠様のご恩をしみじみと思い出されるご様子で、このように語られました。



このお話の中で
藤解とうげ先生が教えよ
うとなさったこと
は、ご信心をいた
だくとは如来の私
への呼びかけに対
する返事だという
ことです。如来が
私を、無始の昔か
ら「十方衆生」と
呼び詰つめに呼んで
下さっている。そ
の声なき声が私の
耳によく届いた
たその時に、私の
口から無心にハイ
ッという返事が出
る。その応答が信
心だということだ

す。さらに無智の凡夫ということも、罪悪の身ということも、自分がそう思う
ことではなく、仏の私への呼びかけの声だということだ。

もし無智の凡夫、罪悪の身と言われていることが、自分でそう思うことだと
したら、それはまことに暗い話になるでしょう。どこにも生きる力は湧わいてき
ません。なぜなら私には比較心しかないからです。比較心は、その前提として

我と人とを峻別しゅんべつ（完璧かんぺきなまでに分離させてしまうこと）した上で、私を他より優位に位置づけたいと強く願望する心です。その比較心に立って自分を無智の凡夫、あるいは罪悪の身と思うとしたら、それは屈辱以外の何者でもありません。およそ救いとは縁遠い話になります。

しかしここで藤解先生とうげは罪悪の凡夫とは、私が自分を罪悪の凡夫と思うことではなく、如来の私に対する呼びかけの内容だと教えて下さっています。仏が私を呼ぶ声としてその言葉が聞こえてきたとき、呼ばれた私は無心にただハイッと返事をするばかりです。

返事は私が考えてするものではありません。私の名を呼ぶ声が聞こえた瞬間、かんぼう間髪を入れず私の中から出てくるものです。そこに私の考え、予想、計画、くわだ企ては何一つ介在かいざいしていません。その意味で私の中から出てきたものではあっても、私を超えています。

藤解先生とうげはその返事が信心だと教えて下さいます。そしてその返事は私が起こしたものでないという意味で、正に賜ったものです。

自分と他人とを峻別し、自分の枠から出ようとしない自他差別の心を破って、そんな計算高い心のもっと奥から、無心に、みどりご嬰兒の声のように、呼ばれるままにハイッと応える。その声に浅いも深いもありません。聞法歴が長い短いのも、そんな経験の差異もありません。仏教の言葉を知っているのいないの、そんな知識の差もあります。ただいのちの根源からの呼びかけに呼応して、ハイッとこのちが応えるばかりです。

ここで私は大石先生がしばしば念仏を、赤ん坊の誕生の声たどに譬えて教えて下さっていることを思い出します。

念仏は人間が目で見たり、耳で聞いたり、心で考えたり、いわゆる後天的な知識じゃないんですね。後天的な知識はめげて（壊れて）いきます。ところが南無阿弥陀仏は、無量寿むりょうじゅ、永久の命ですから「オギャー」と同じなんです。オギャーというのは人間の声であってね、同時に生命力の声なんです。

人間の言葉は意識を通して話しておりますが、オギャーというのは、あれは

天地の中に流れている偉大なものが出た声でしょう。日本人の声じゃないんです。アメリカ人の声でもありません。黒人、白人の声というものでもありません。まあ人間の生命力の声なんです。あれと同じものなんです。念仏はね。人間の意思を通さない、六感を通さない如来の声なんです。そこから出るものですから、我執を壊す力があるんです。これが本当の声なんです。

『生きていてよかった』二十八頁、二十九頁

この人間の生命の産声うぶごゑとしての念仏は、如来が深い矜哀けうあいまことの心で悲しみいつくしむことをもって無始の昔から絶えず私を南無阿弥陀仏と呼び続けておられる。その如来の心がようやく私にまで至り届いて、思わず私がハイッと応えた。その応答の声でもあります。つまり如来の呼び声にハイッと返事した声です。

思えば、仏教史上に巨大な足跡を残されたインドの天親菩薩てんじんぼさつが、ご自身の大成された深遠な学問をさらりと投げ捨て、一人の凡夫に帰って、世尊せそん（お釈迦様のこと）の名を呼びつつ表白されたのが「世尊我一心帰命 尽十方無碍光如来せそんがいつしんきみょう じんじっぽうむげこうにょらい願生安樂国」がんしょうあんらくこく（世尊よ、私はあなたが勧めて下さった十方に障りなき光の如来の呼びかけにただ一筋に従い、その如来の国に生まれんと願って歩みます。）の一句です。

親鸞聖人は天親菩薩のこの一心について、

一心しんというのは、教主世尊きょうしゆせそんの御ことみのりをふたごころなくうたがいなしとなり。すなわちこれまことの信心なり。

『尊号真像銘文』

と教えて下さっています。「御ことみのり」とは、尊い人のお言葉、命令という意味です。ここでは教主世尊きょうしゆせそんの勧めたまうお言葉という意味です。「ふたごころなくうたがいなしとなり」とは、世尊のその勧め、命じたまうお言葉に、ハイッと無心に応えて従っていくということ。親鸞聖人はこれこそがまことの信心だとおっしゃっています。

そして親鸞聖人もその天親菩薩と同じように、「親鸞においては、よき人法然上人の『ひとすじに念仏して阿弥陀仏に助けられていく身になりなさい』とい

う仰せをそのまま身に受けて念仏申すばかりであつて、他に何らの深い考えがあるわけではありません。」と、ご自身の信心のぎりぎりのところを語っておられます。これは天親菩薩が「世尊よ。私はあなたの勧めに順つて阿弥陀仏に一心に帰命いたします。」と表明されたことと全く符合ふごうしています。

お釈迦様も法然上人も麻原彰晃のように決して「われに來たれ」とはおっしゃらないのです。「阿弥陀仏に行きなさい」と勧められます。それが「よき人」、つまり真実の善知識ぜんちしき（私をまことの道へと教え導いて下さる方）です。人間が人間に対して「われに來たれ」と言うとしたら、それは人が人を支配しようとする悪魔の言葉です。それに対して「阿弥陀仏に行きなさい」というのは、「あなたはあるあなた自身のいのちに帰りなさい」と勧める言葉であり、これこそ人を真に自立させ、人間として本当に尊敬する言葉です。

このよき人の勧めの声を、中国の善導大師は「仁者きみただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん。もし住まらばすなわち死せん」という言葉で表しておられます。「仁者きみ」という字に、深い尊敬と親愛の念がこめられているのを感じることができます。そしてよき人のこのような懇切な勧めの声の中に、無始の昔から「われに來たれ」と呼び続けてこられた阿弥陀仏の私に対する深い矜哀こうあいの心を聞き取られたのです。この阿弥陀仏のわれを呼び戻す声を、善導大師は「汝一心に正念しょうねんにして直ちに來たれ、我よく汝を護まもらん。すべて水火の難に墮だせんことを畏おそれざれ。」という言葉で表されました。

さてここにも「一心」という言葉が出てきます。善導大師が述べられたこの「一心」が、天親菩薩の「世尊我一心帰命…」の「一心」を念頭に置いて言われた言葉であるのは明らかです。ただし天親菩薩の「一心」が行者の側から言われているのに対して、善導大師の場合は阿弥陀仏が我々に一心であれと呼びかけ続けておられる。そういう阿弥陀仏の我々に対する願いの深さを表す言葉として受け取っておられます。そして親鸞聖人は善導大師のこの「一心」についてもまた、「一心の言は、真実の信心なり。」とおっしゃっています（愚禿抄）。つまり前述のように、行者の側から述べられた天親菩薩の「一心」も「まことの信心」であれば、また仏の側から述べられた善導大師の「一心」についても「真

実の信心なり」と述べておられるのです。すなわち両者の「一心」は別物ではなく、実は一つなのだということです。ここが大事なところですよ。つまり一心といっても、一心不乱という言葉の如く私が一心になることではありません。そうではなくて仏の我々に対する呼びかけの心が一心そのものであり、その仏の一心の心が私に届いて「世尊我一心帰命！」となったのです。すなわち仏の一心と行者の一心が呼応しているのです。

ここで私は大石先生がしばしば引用される姥捨て山の譬え話を思い出します。姥捨て山の話については前回のご案内の中でも取り上げましたが、話のあらすじについての説明が欠けていました。そこでそれについてここで簡単に触れておきたいと思います。

姥捨て山の話というのは、江戸時代の貧しい山間地方において、限られた食糧事情の中で村人たちがかるうじて生き延びていくための手段として、口減らしと介護の労力を軽減するために、一定の年齢に達した老人を人跡の絶えた険しい山奥に捨てるという悲しい掟が生きていた頃の話です。ある日、村に住む一人の男が村の掟に従って、年老いた母親を背中に負ぶって姥捨てに出かけました。道が山奥にさしかかる頃、背中の母親が時折小枝を折っては道に落とすのに息子が気づきます。注意して観察していると、決まって分かれ道の所で小枝を落とすことがわかりました。息子は内心、「さては母親は捨てられた後、これを目印にして家に帰ってくるつもりだな。」と思います。しかし何気ない風を装って、「お母さん、何で木の枝を折ったりするの」と尋ねます。すると母親は、「お前はこんな山奥に入るのは初めてじゃろ。帰りに迷うといけんと思うて分かれ道の所に小枝を落としておいたから、それを目印にして迷わんように気をつけて帰れよ。」と答えました。この言葉に息子はわが心を悔い、村八分になるのも覚悟の上で、母親が制止するのも押しとどめ、意を決して今来た道に戻り始めるという物語です。

大石先生は如来の私に対する大悲心の深さを、しばしばこの物語に譬えて話して下さいます。その内の一部を、前回取り上げたものと重複する部分もあり

ますが、引用してみます。

姥捨^{うばす}て山で、息子が枝を折ってくれるお母さんの心に気づいた。気づいてみたら、ずっと前からお母さんは枝を折り続けてくれていた。考えてみれば、お母さんは自分がこまい（小さい）時から苦勞して苦勞して私一人を目当てに育ててくれていた。そのことに気づく。

これと同じで、本願は私が生まれるずっと前、久遠の昔からじっと私を照らして下さっておられた。

（平成八年、長仁寺報恩講より）

これが私の身を深く案じて止まぬ親の「一心」に気づいた心です。それに気づくとどうなるか。気づけばそのままではいけません。続いて大石先生のお言葉を尋ねてみます。

親の心は沁^しみ込むもの。姥捨て山の親の心が響いたら、「わかりました」ではないでしょう。「わかりました」という時には《わし》がおりますがね、「お母さん、私はどないな苦勞をしてもいいから、これからお母さんを大事にさせて下さい」と。その心は親からくる心でしょう。その時《わし》が消えるんです。親がお母さんを連れて帰ろうという心をくれたわけです。

（平成九年、長仁寺報恩講より）

私はこのお話を聞かせていただいた時、そうかと思いました。「たまわりたる信」とはこれではないかと思いました。「私はどないな苦勞をしてもいいから、これからお母さんを大事にさせて下さい」と思い立った心は今までの息子には決してなかった心です。今までの息子はただ村の掟に従うのみであり、さらに母を疑う心しか持ち合わせていなかったわけです。その息子が、自分हतとえ村八分になってもいいからお母さんを大事にさせてもらおうと、そう決心して今来た道に戻り始めたわけです。そのような自分を度外視した決意が息子に生まれたわけです。この心はまぎれもなく息子の中に起こった心ではあるけれども、息子が起こした心ではありません。母親からもらった心です。これは正し

く自分を越えた心を母親からもらったのです。

先ほど、ちょうどこれを書いている時、川の対岸にある集会所の大型スピーカーから正午のオルゴールの音（グリーンスリープスの曲）が高々と流れ始め、それに合せていつものように飼い犬のクロがウオーン、ウオーンと鳴き始めました。クロもオルゴールの音に、眠っていたはるか昔の本能が呼び覚まされるのだなと思いました。私もこのクロと同じでありたいと思います。クロと同じように、師の深厚なるお育てを通して、はるか昔から私を呼び返して止まぬ如来の声に触れ、私の中に久しく埋もれていた遠い本能、宗教的**本能**、願生心を呼び覚まされ、浄土へ向かって歩んで行く者となろうと思います。

南無阿弥陀仏

文隆拝

平成十四年五月十二日

攝取山 心光寺